

日本中國學會報 第七十集  
二〇一八年十月六日 發行 拔刷

中唐の「尤物」論と「長恨歌」の「恨」

竹村則行

# 中唐の「尤物」論と「長恨歌」の「恨」

七四

## 竹村則行

### 一 はじめに

今から千二百年以上も前、九世紀に入って間もなくの中國中唐の長安及びその近郊において、元稹（七七九―八三二）、白居易（七七二―八四六）、陳鴻（生没年不詳）を含むかなり狭いコミュニティ間で、所謂「尤物」（美女）への對處法を巡って興味深い發言が重ねられた。中でも元稹の「鶯鶯傳」（『太平廣記』卷四八八）では、張生（元稹）が「天生の美女は出逢えば必ず魅力に取りつかれるのだから、その魅力に弱い男はいつそ逢わない方がましだ」という、現代では強く違和感が残る獨特の美女對處法を友人間に披露する。更には白居易の「長恨歌」（〇五九六）と同一情況下に成立した陳鴻の「長恨歌傳」にも「尤物」の語が見え、身分が合わない楊貴妃を異常に愛して國を傾けた玄宗を戒めている。加えて白居易は新樂府「李夫人」（〇一六〇）においても、同様の趣旨を時の憲宗皇帝に上奏している。特にその末句の「此恨長在無銷期」（此の恨み長に在りて銷ゆる期無からん）が「長恨歌」の末句「此恨綿綿無絕期」（此の恨み綿綿として絶ゆる期無からん）と殆ど同一表

現であるのは、逆に今日も議論が喧しい「長恨歌」の「恨」の主體や内容を考察する上で大きな示唆を與えるであろう。中唐長安の狭い範圍内で囁かれた「尤物」論は、もう少し仔細に検討すれば、或いは學界長年の懸案である「長恨歌」の「恨」問題についても解決へのヒントが見つかるのではないだろうか。

拙稿はこのような疑問や發想から出發し、「長恨歌」の主題、特に「恨」の解釋について、詩作時の白居易の官民（雅俗）の立場に留意しながら、當時その周圍でホットな話題であった「尤物」への對處法の觀點から再検討を試みるものである。従來白居易詩文の解釋に關しては夥しい蓄積があるが、管見の限り、中唐の「尤物」について個別論文での言及はあっても、「尤物」論から見えた「長恨歌」專論はまだ管見に入らない。

「長恨歌」が成立して約一千二百年、名詩の主題や語句の解釋を巡って今日もなお議論が喧しいし、今後も續くであろう。その原因の一端は曖昧な表現に終始した「長恨歌」自體にもあるだろうが、代々變化する後世の解釋も混亂に輪を掛ける。屋上架屋のそしりを恐れつつ、拙稿も解釋史の末端に加えていただければ幸甚である。

## 二 近年の「長恨歌」の「恨」解釋の検討

「長恨歌」の内容や評價に關する先行研究の紹介については、下定雅弘「戦後日本における白居易詩の研究」が今日最も網羅的で詳細である。そこに紹介された多數の關連論說の中から、ここでは、以下、近藤春雄・太田次男・松浦友久・下定雅弘の四氏に絞り、特にその「長恨歌」「恨」說を中心に、私なりにあらかじめ論旨の要點を整理しておきたい。

まず近藤春雄<sup>5</sup>は、「長恨歌」は「玄宗と楊貴妃の愛情の世界を詠じたものであり、「それはまた亡き楊貴妃を思うて悲しむ玄宗の長恨を主としたものであった」と述べる。「長恨歌」に關する日本の從來説が動もすると玄宗と楊貴妃の愛情説に傾斜していたのに比べ、「亡き楊貴妃を悲しむ玄宗の長恨を主とする」と明言した碩學の見解は新鮮である。

續いて太田次男<sup>6</sup>は、「長恨歌」を「長恨歌傳」と比較し、「長恨歌」中の諷諭表現に言及しながら、次のように述べる。

ただし、長恨歌は諷諭詩のものではない。政治の現實の世界に眼をやりながらも、それより一段と高い立場にたつて、人間の有限性が歌われ、愛の悲しみによつて歌は結末をつけられている。

太田は、諷諭もさることながら、「愛の悲しみ」を中心に据えて解釋しているように見受ける。

次に、松浦友久の論文『「長恨歌」の主題について―「恨」の主體と作者の意圖』<sup>7</sup>は、「長恨歌」の主題について頗る論旨明快である。松浦は、先行研究を慎重に検討した上で、自説の「恨」と「怨」の使分けや、「長恨歌」全體の構成、白居易や元稹における「長恨」「此

恨」の使用例等の多方向から慎重に分析し、「長恨歌」の「恨」の主體を楊貴妃や玄宗・楊貴妃の兩名に比定する從來説を否定し、次の結論を導く。

「長恨歌」の基本主題は「長恨・此恨」に他ならず、かつその「恨」は玄宗における楊貴妃喪失の悔恨・痛恨の情に他ならない。

拙稿はこの松浦論文に啓發され、「長恨歌」の諷諭の問題や作者の制作意圖、また當時や後世における「長恨歌」受容の問題について、特に「尤物」の觀點を加えて新たに検討を試みるものである。

最後に、白居易研究に造詣の深い下定雅弘『長恨歌―楊貴妃の魅力と魔力』<sup>8</sup>は、「長恨歌」について、廣範かつ總合的に考察した最近の研究成果である。該著は松浦論文や諸田龍美の論著<sup>9</sup>を援用しつつ、「長恨歌」の主題について次のように結論づける。多くの言及の中から二箇所のみ挙げる。

「長恨歌」は、地上では萬能の皇帝が愛の虜となる物語によつて、男が女を愛してしまつた時の、いかんともしがたい愛の深さ・女を失つた時の無限の痛恨、この愛の驚嘆すべき力という人間の眞實を、思う存分歌いあげている（五八頁）。「長恨歌」の最後の二句（引用者注：「天長地久有時盡 此恨綿綿無絕期」）を、私は貴妃を失つた玄宗の痛恨の表現であり、同時にこれに共感する白居易自身身の深い詠嘆だと見る（一四六頁）。

下定も、「恨」の主體を玄宗に比定する點で前三者の見解を踏襲する。特に「長恨歌」最終二句の解釋は新鮮である。

以上大略ではあるが、現代の代表的な先行研究を見ると、いずれも「長恨歌」の主題たる「恨」の主體と内容について、玄宗による貴妃喪失に伴う痛恨という方向で解釋が共通することが分かる。この解釋

の方向は、今日日本の學界における正解答、定説と言える。

ここで、現代中國における同問題の研究情況の概略を瞥見しておきたい。蹇長春「長恨歌の主題に關する議論」や、上掲松浦論文が言及する數篇の論文を拜見すれば、中國の近年の學界では、「長恨歌」の主題として、大まかに愛情説、諷諭説、隱事説、二重主題説、感傷説等の諸觀點があり、このうち愛情説は從來から根強く存在するものの、總じて諷諭説が優勢であるように見受けられる。しかしなお最終結論には至っておらず、今後も種々の異説が提起される可能性がある。詳細は同論文、及び管見に入つた近年の下記著作に詳しい。この中、張中宇、王萬嶺説について次章に紹介する。

周天『《長恨歌》箋說稿』<sup>12</sup>

周相錄『《長恨歌》研究』<sup>13</sup>

張中宇『白居易《長恨歌》研究』<sup>14</sup>

王萬嶺『《長恨歌》考論』<sup>15</sup>

付興林・倪超『《長恨歌》及李楊題材唐詩研究』<sup>16</sup>

### 三 「長恨歌」最終二句の解釋に關する 中國近年の研究瞥見

「長恨歌」の最終二句「天長地久有時盡 此恨綿綿無絕期」（天は長く地は久しきも時有りて盡く 此の怨みは縣縣として絶ゆる期無からん）の「此恨」、更に詩題にも用いられる「長恨」の解釋をめぐり、中國の學界では從來多くの意見が提起されてきた。ここでその全體を詳しく繙く餘裕は無いが、近年の研究成果として、張中宇『白居易《長恨歌》研究』と王萬嶺『《長恨歌》考論』の兩著を挙げ、關連する研究の動向を探れば、およそ以下のようなものである。

まず張中宇著一六九頁は、結論のみを引用すれば、  
这两句诗在结构上具有獨立性，是对全篇的总结，并非简单从屬於仙界寻找情节（この兩句は全體の構成上獨立性があつて、全詩の總括をなしており、方士が仙界に楊貴妃を尋ねる場面に單純に屬するものではない）。

と論ずる。最終二句を獨立した全詩の總括と見る見方は新鮮である。また同著一七五頁は次のように結論する。譯文中の（ ）は引用者。

《長恨歌》の主題是、通过描寫李、杨情愛悲劇的复杂过程，反映封建帝王荒弛朝政、政治腐敗等造成國家动荡、愛妃慘死及凄苦悲涼、深情无奇的严重后果，婉转批评唐玄宗因为承平日久滋生的骄矜懈怠而重色情、忽视國家管理的错误行为，并以此作为后世的鉴戒（「長恨歌」の主題は、李（玄宗）と楊貴妃の複雑な悲劇の愛情の經緯を描寫することを通して、封建帝王の緩み荒んだ朝政や政治腐敗等が國家の動亂や愛妃の残酷な死、及び玄宗の凄慘な悲哀、やるせない物思いという深刻な結果を招いたことを詩中に描き出し、そのことで、玄宗が長く續いた天下太平による驕りと怠情から情愛を偏重し、國家管理をなかがしろにした誤つた行動をやんわりと批判し、併せてこの事を以て後世の戒めとすることである）。

やや長い結論であるが、ここには、「長恨歌」の主題として、玄宗と楊貴妃の情愛の描寫を通して、玄宗の誤つた治政によつて國家の動亂を招いたことを作者が批判し、このことを後世の教訓とすることが述べられる。二人の情愛と玄宗の治政批判を併せ含む、從來の愛情説と諷諭説とを兼ねた説明であろうか。

これに對し、王萬嶺著二八六頁は、張中宇が主張する「天長地久有時盡 此恨綿綿無絕期」の分段獨立説を否定し、二句を直前の「在天

願作比翼鳥 在地願作連理枝」に續く楊貴妃の發話と見て、次のように述べる。

根据「此恨绵绵无绝期」的「此」字可知，杨贵妃所说的「此恨」，與李杨二人當年七月七日在长生殿「密誓」有直接的关系。他們當年密盟的誓愿是「在天愿作比翼鸟，在地愿为连理枝」，杨贵妃在说完这件事以后，紧接着就对此叹息不已。所以，全诗最后慨叹的两句，不是當年长生殿密誓的内容，而是由追忆长生殿雙方盟誓的情境引发出来的感叹（「此の恨みは綿綿として絶ゆる期無からん」の「此」字によつて、楊貴妃のいう「此の恨み」が、玄宗と楊貴妃の二人が昔七月七日長生殿において「密かに誓つた」事と直接關連することが分かる。彼らが昔密かに盟つた誓いとは「天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と爲らん」であり、楊貴妃はこの事を方土に語り終えるや、すぐさま深く嘆息した。それ故、全詩の最後に慨嘆したこの兩句は、昔の長生殿における密誓の内容を指すのではなく、長生殿での二人の密誓を追憶する情景から導き出された楊貴妃の感嘆を指しているのである）。

要するに王萬嶺は、「長生殿」最後の二句、特に「此恨」は直前に述べる七夕密誓の場面を追憶して楊貴妃が發した慨嘆であると言う。王萬嶺はその他の箇所においても、「長恨歌」至情説を力説し、最終二句「此恨」の主體は楊貴妃であることを一貫して主張する。この點では張中宇説と相容れないが、これらの解釋の相違は從來も同様であったのであり、學界としてまだ決着していかないことが分かる。

#### 四 楊貴妃の出自の検討

ここで、後の論述に深く關わる主役楊貴妃の出自について検討して

おきたい。散見する各種の傳記資料を總合すれば、楊貴妃は明らかに高貴な家柄の出身ではない。かといつて、當時社會の最下層の出身でもないようである。『舊唐書』卷五一の「后妃傳上（楊貴妃）」は、「父は玄琰、蜀州司戶」とする。司戶は戶籍擔當の地方役人か。從七品下の官人ではあるとしても、皇帝妃にふさわしい高貴な身分には該當しない。樂史の『楊太眞外傳』に「弘農華陰の人」とあるのは、貴妃の出世後にその出自が名族に付會されて強調された感が強い。一説にいう遠祖の楊汪が弘農華陰の人であることを認めるとしても、貴妃出世後の一族楊國忠や三夫人の粗暴な振る舞いは（竟に後に一族の滅亡を惹起するが）、とても真正正銘の傳統名族のそれとは思えない。當時の庶民の楊貴妃への關心は、「遂に天下の父母の心をして 男を生むを重んぜず 女を生むを重んぜしむ」という風潮に象徴されるように、我が庶民の代表として楊貴妃に共感と親近感を寄せるものであった。有名な李白の「清平調詞三首」其の二（『李太白文集』卷五）に「可憐の飛燕 新粧に倚る」として楊貴妃を漢の趙飛燕に喩え、また白居易自ら前掲の新樂府「李夫人」において楊貴妃を漢の李夫人に喩えることから、當時の關係者の共通概念として、表面上は楊貴妃の美貌を讚美しつつ、實はその底に楊貴妃の必ずしも高貴ではない出自を認識していたことが分かる。更に言えば、楊貴妃が當初玄宗第十八子の壽王妃から後に父君の玄宗妃に轉籍をした史實についても、彼女が實質上は物品としての讓渡が可能な歌妓（同時に家妓）としてみられていたことがその實現を促したと筆者は考える。むろん、皇帝の絶対權力と、皇帝に絶対服従すべき皇太子との力量の差は當然あつたであろう。壽王妃や玄宗妃となつた楊玉環に關する經緯を知っているのは玄宗付きの生涯の宦官であつた高力士であろうが、今となつては眞相は深い闇の中である。

以上を要するに、楊貴妃は決して皇帝妃に相應しい歴とした、弘農華陰<sup>①</sup>の高貴な名族の出身ではなく、通常（それも卑賤寄り）の出身の、とりわけ歌舞を得意とした美貌の才女であったであろうことを、拙稿の讀者の共通認識として、まずは確認しておきたい。

## 五 「尤物」をめぐる發話者と受話者の 官民（公私）の立場

いよいよ本論に入る。ここでは、元稹「鶯鶯傳」・陳鴻「長恨歌傳」・白居易「李夫人」の三作品に共通するキーワードである「尤物」の意味、更には發話者と受話者が屬する官民（公私）の社會的立場について検討しておきたい。

「尤物」は美女の意である。多くは關係者に災禍をもたらす「妖魔」の貶意を含む。「鶯鶯傳」では、張生（元稹）が鶯鶯との戀愛が破局した後、次のように釋明すると、物語（傳奇）を聞いた校書郎の仲間が皆感歎したという。

張曰、大凡天之所命尤物也、不妖其身、必妖於人。…余之德不足  
以勝妖孽、是用忍情。…時人多許張爲善補過者。（張曰く、大凡天  
の尤物に命ずる所なるや、其の身に妖せざれば、必ず人に妖す。…余の  
徳は以て妖孽に勝つに足らず、是を用て情を忍べり。…時人多く張に許  
して善く過ちを補ふ者と爲す。）（張生が言うには、およそ天がこの世の  
美女に降す運命は、その身に妖いをもたらすのでなければ、必ず他人に  
妖いをもたらすものだ。…私の徳はまだこのわざわいに打ち勝つことが  
できない。そこで私はやむなく鶯鶯への戀情を抑制したのだ。…世間  
では、多く張がよく過ちを償ったものとした。）

ここに張生が述べる「尤物は必ず人に妖いをもたらす。…自分さま

だそれに打ち勝つ徳を有していないので、戀情を抑えたのだ」という自己辯明は、古く『春秋左氏傳』昭公二十八年にいう、「夫れ尤物有らば、以て人を移すに足る。苟も徳義に非ずんば、則ち必ず禍有り」（夫有尤物、足以移人。苟非徳義、則必有禍）を踏まえたものである。ここにいう張生の戀愛觀は、男女平等の自由戀愛をモットーとする現代の戀愛觀からは理解し難いが、小説内での張生の辨明を私なりに付度すれば、およそ以下のようなだろうか。まずその経緯は次の通りである。

張生は普救寺で偶然出會つた崔鶯鶯に一目惚れし、鶯鶯もやがて相應じて、二人は戀仲に陥り、張生は鶯鶯との結婚を考へるようになる。ここで、張生が科擧受験のために上京することになり、鶯鶯を残して單身上京する。やがて試験に落第した張生が鶯鶯に手紙を届けると、鶯鶯からの返信には張生を思ふ心情が綿綿と綴られていた。しかしなぜか張の心は鶯鶯から離れてしまい、それから一年後、二人はそれぞれ別の伴侶と結ばれる。

ここに紹介した二人の愛情をめぐる要旨から分かることは、科擧受験が二人の破局の要因となったことである。即ち、あれ程純粹に燃え上がった二人の戀情が、どうしたことか、張生の科擧受験の爲の上京と續く不合格を契機に、急速に冷めてゆく。このことは何を意味するだろうか。二人の戀愛は専ら個人の情動に任せた私的行動であり、一方、進士合格を目指す科擧受験は、個人に加えて家族や國家の命運に深く關わる一大社會活動である。現代の考えからすれば、張生が科擧に合格するまで二人の婚姻を待つという大人の對處法もあつたかと思われるが、元稹の實際の戀愛體驗をなぞつたと覺しい原作「鶯鶯傳」（原名は「傳奇」）では、張生の科擧受験と落第という公的社會活動の頓挫によつて、二人の戀愛という私的行爲は脆くも破綻することになる。

元頊の戀愛破綻の釋明に對して、周圍の校書郎の友人が「情を忍ぶ」「禍を補う」ものとして感嘆したのは、このような公的活動を私的感情に優先させた張生（元頊）の選擇に對して、公人の校書郎たる友人仲間（白居易を含む）<sup>23</sup>が、それぞれ自分の事としてこぞつて共感したからに他ならない（一方、残念ながら相手の鶯鶯への配慮が全く見られないのは、當時の女卑觀の反映であろう）。さて「尤物」（美女）は、受験生にとつては將來の出世の大道を妨害する妖魔（邪魔者）であつた。當時、貴族社會の規準からすれば寒門出身に屬する元頊、白居易にとつて、將來の立身出世の爲には、個人戀愛の經緯はともかく、科擧試験の合格及び有力家門との婚姻が必須條件であつたことは考慮しておくべき重要事である。かくて貞元二十年（八〇四）において、親友の元頊と白居易が共に校書郎として、自由戀愛で出會つた美人について、將來の出世を妨害する「尤物」認識を共有していたことは、後の「長恨歌傳」や「李夫人」に言及する「尤物」を考える際に重要なキーワードとなるであろう。

その二年後の元和元年（八〇六）、長安から來た新任の整屋縣尉白居易を、隱者の王質夫と共に名利仙遊寺に歓迎した際に詠まれた陳鴻の「長恨歌傳」は、末尾にその主題が「尤物（楊貴妃）の例に懲る」ことであることを明記する。即ち「意者不但感其事、亦欲懲尤物、窒亂階、垂於將來者也。」（意とする者は但だ其の事に感ずるのみならず、亦た尤物に懲り、亂階を窒ぎ、將來に垂れんと欲する者也。）とあるのがそれである。陳鴻は貞元二十一年（八〇五）の進士であり、前年の校書郎元頊・白居易やその仲間内に廣まつた「尤物」觀を共有していた可能性がある。とすれば、陳鴻が述べる「尤物に懲り」云々は當日仙遊寺を訪れた三名の共通話柄として、近郊の馬嵬に傳わる楊貴妃傳説も含

め、大いに盛り上がったたであろう。

「長恨歌傳」はまた、樂天深於詩、多於情者也。：歌既成、使鴻傳焉。（樂天は詩に深く、情に多き者なり。：歌既に成り、鴻をして焉を傳せしむ。）という。ここには、「多情」な白居易が情感深く「長恨歌」詩を詠み、陳鴻がその「注疏」として「長恨歌傳」文を認めたという二人の役割分擔を述べる。とすれば、後の『白氏文集』卷十二「長恨歌」に陳鴻の「長恨歌傳」を併録するのは、編者白居易の成立當初からの意圖を傳えたものと察せられる。ともあれ「長恨歌」「長恨歌傳」は、長安から來た新任の青年長官と地方在住の名士・隱者が連れ立つて私的に名利に遊んだことを契機に、五十年前に近郊の馬嵬で發生した楊貴妃の悲劇の最期にかかる傳説を、白居易が情感深く詩に詠み、陳鴻がその注疏を試みたものと判斷される。

最後に、白居易の「李夫人」は、元和四年（八〇九）、諫官左拾遺の任にあつた白居易が、時の憲宗に上呈した「新樂府五十首」の一である。ここに詠まれる「尤物」も、先の「鶯鶯傳」（八〇四年作）、「長恨歌傳」（八〇六年作）の延長線上にあると考えられる。則ち詩の終段、楊貴妃や「尤物」に關わる描寫は以下のものである。（）は引用者注。

又不見泰陵一掬淚 又見ずや 泰陵（玄宗）一掬の淚

馬嵬路上念楊妃 馬嵬路上 楊妃を念ふ

縱令妍姿艷骨化爲土 縱令 妍姿 艷骨 化して土と爲るとも

此恨長在無銷期 此の恨みは長に在りて 銷ゆる期無からん

生亦惑 死亦惑 生きても亦た惑ひ 死しても亦た惑ふ

尤物惑人忘不得 尤物は人を惑はして 忘れ得ず

人非木石皆有情 人は木石に非ず 皆情有れば

不如不遇傾城色 如かず 傾城の色に遇はざらんには

ここには、愛妃李夫人を亡くして悲しむ漢の武帝の「傷心」に續き、馬嵬で楊貴妃を亡くした同じ唐朝五代前の玄宗の「恨」を述べる。「縦令妍姿艶骨化して土と爲るとも 此の恨みは長に在りて銷ゆる期無からん」は、三年前の「長恨歌」の末尾「天は長く地は久しきも時有りて盡く 此の恨み懸懸として絶ゆる期無からん」に酷似する表現であり、楊貴妃を亡くし（國を傾け）た玄宗の無限の恨みを述べるものである。この「李夫人」と「長恨歌」の表現の酷似は、「長恨歌」の「恨」の主體が「李夫人」に同じく玄宗であることの證左となり、その主體を楊貴妃に比定する所謂「長恨歌」主情説への有力な反證となる。「李夫人」では、「尤物は一度出會うと生死を超えて情ある人を惑わし續けるものだから、なるべく遇わなみに限る」と結ぶ。この表現は、天子の「嬖惑」（身分を越えた過度の寵愛）を諷める新樂府としては一見頼りなく唐突に見えるが、實は元稹「鶯鶯傳」・陳鴻「長恨歌傳」を経て、白居易とその周囲の受験生や宮中の若手文人間において、當時恰好の話題として共通の認識があつた上での、諫官としての公式發言であつたと考えられる。

また別の見方をすれば、それまでは専ら關連する私人間における戀愛指南として語り傳えられた「尤物」論が、諫官たる白居易が『新樂府』李夫人に取り上げることによつて、やおら國家に關わる皇帝の戀愛問題に發展したということもできる。こうして、「尤物」（美女）は人を害するものだから、その出會いと對應には細心の注意を要する、むしろ逢わないほうがよい“という一見奇妙と思える”理屈”は、個人レベルの粹を超え、崔鶯鶯、楊貴妃の實例を経て、進士のみならず天子の耳にも達するほどの普遍性を持つ特色ある”理論”に昇華したのである。

ここで、「鶯鶯傳」「長恨歌」「長恨歌傳」「李夫人」の四作品について、成書年、發話者・受話者、作者の公私の別、讀者の方向、「尤物」概念の要點等を整理しておけば、およそ次のようになる。

・「鶯鶯傳」…八〇四年作。發話者は張生（元稹）。受話者は校書郎仲間（白居易・陳鴻？を含む）、即ち官人の立場である。場所は宮中祕書省。公的場所ではあるが、そこで語られた自己の生々しい戀愛談は直近に起こつた私的體驗である。張生の鶯鶯との戀愛は八〇〇年頃、元稹と章叢の結婚は八〇三年である。

・「長恨歌」…八〇六年作。發話者は白居易。受話者は王質夫・陳鴻。場所は長安西郊の蓋屋縣仙遊寺。三名の私的會合。當面私人の立場で「長恨歌」を詠んだ白居易は、後述の通り、後に「風情有り」（豊かな情感がある）と自ら評價し、「感傷」部に分類する。公的な「諷諭」説も根強いが、作詩の現場はあくまで私的である。

・「長恨歌傳」…八〇六年作。「長恨歌」と同時同所の作。發話者は陳鴻。受話者は白居易・王質夫。場所は同じく長安西郊の蓋屋縣仙遊寺。三人の私的會合。末尾に述べる「尤物」は上記「鶯鶯傳」以來の共通認識である。近郊に馬嵬があり、楊貴妃の最期と「尤物」の話題で議論が沸騰したのであろう。

・「李夫人」…八〇九年作。發話者は白居易。「新樂府」の一。受話者は憲宗皇帝及び同僚官人。場所は宮中。諫官左拾遺の職務に基づく白居易の公的文人活動の一。先の「鶯鶯傳」「長恨歌傳」では私的立場で吐露された白居易の「尤物」觀が、ここでは諫官という公的立場で堂々と天子に上奏される。



## 六 「尤物」観から見た「長恨歌」の「此恨」の主體

この章では、これまで見てきた「尤物」観からすれば、「長恨歌」の「恨」  
「此恨」の主體は言われるような楊貴妃ではなく、玄宗（乃至作者）と  
なるべきであろうことについて、重複を恐れず述べたい。

まず「鴛鴦傳」において、張生（元稹）の説く所では、「およそ「尤物」（妖魔美人）は出會つた人や關係者に必ず災いをもたらすものだ。自分は鴛鴦という「尤物」と出會つたが、その災いに打ち勝つ徳が無いので、敢えて自分の方から戀情を抑制したのだ」という。今日から見れば相手を無視した身勝手な言い草だが、「鴛鴦傳」には「時に坐せる者、皆爲に深く歎ぜり」とあり、張生の説明を聞いた者（元稹の校書郎仲間）は一同深く共感したという。その後、二人が破局した後、張生と鴛鴦はそれぞれ別の異性と結婚することになる。この際の手續き等について文中には明記しないが、それぞれ社會的手續きを経ての通常の結婚をしたと思われる。張生（元稹）の別の異性と結婚とは、貞元十九年（八〇三年）、元稹と韋叢との結婚を指すであろう。「鴛鴦傳」には最初の自由戀愛の破局に關して、張生も鴛鴦も「恨」語は用いないが、二人の關係が急速に冷めた直接の契機が張生（元稹）の受験の爲の上京、及びそれに續く落第という國家の公式行事にあつたことは明白である。「尤物」は會う人ごとに危害を及ぼすものだから、美人に出會いそうな場合はまず避けるべきである」という奇妙な理屈が、白居易の親友元稹とその純愛の美女鴛鴦との戀愛譚において提起されていることは、その是非判断はともかく、白居易の「長恨歌」における玄宗と楊貴妃の戀愛譚について語る際にも注意すべき先行事例とな

る。なお、この際の「尤物」語が、後の楊貴妃がそうであるような「傾國」の妖女の如き深刻な響きを持たないのは、張生と鴛鴦間の戀愛が所詮個人のレベルに終始したのに較べ、玄宗―楊貴妃間のそれは國家の傾斜や崩壊に直結するという影響規模の深刻さに由来するであろう。

次に陳鴻の「長恨歌傳」では、「長恨歌」が言及しない玄宗の楊貴妃以前に深く愛した二妃の逝去、楊貴妃の壽王邸からの轉籍、仙界に來訪した方士を楊貴妃が一晩門外に待たせたこと等を淡々と客觀的かつ冷靜に敘述する。専ら楊貴妃と玄宗の熱愛描寫に固執する白居易「長恨歌」と好一對の表現であるが、筆者はこれも二人の役割分擔の表れであると認識する。末尾に、陳鴻は作品の主題について、陳鴻自身の解釋（同時に白居易の解釋をも含むであろう）を述べ、「意者不但感其事、亦欲懲尤物、窒亂階、垂於將來者也。」（意とする者は但だ其の事に感ずるのみならず、亦た尤物に懲り、亂階を窒ぎ、將來に垂れんと欲する者也。）と明記する。このことの意味は重い。つまり、陳鴻（白居易を含む）は、「長恨歌」「長恨歌傳」の玄宗―楊貴妃故事が單に感動的であるのではなく、そこに、玄宗が「近づくと痛い目に遭う尤物（美人）に懲りて、世の中が亂れる端緒を塞ぎ、將來への教訓とする」ことが主題であると述べるのである。陳鴻の口を介した建前的な言い方ではあるが、ここには「長恨歌」「長恨歌傳」の主題としての諷諭的側面が示されるであろう。

同一の状況下で詠まれた白居易「長恨歌」は、楊貴妃の出身等の些末描寫は「長恨歌傳」に任せ、専ら玄宗―楊貴妃の情愛を情感深く描きあげる。それは、仙界に住む楊貴妃を尋ねて方士が來訪した際、病臥していた楊貴妃が慌てて起き上がり、身繕いもそこそこに方士を迎える描寫などに典型的に現れるが、詩という文學様式の限界もあつて

經緯の全てを詳細に盛り込むのは技術的に困難である。特に懸案の最終二句「天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期」は、しばしばその直前の楊貴妃の玄宗追憶語である。「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」と連續して、楊貴妃の必死の哀願を示す語と解釋されてきた。それは一方で楊貴妃の純情を示す有力な解釋であることは否定しないが、筆者は、「長恨歌」が終盤の楊貴妃の玄宗追憶を含めて、全體として終始玄宗の立場から語られていること、「長恨歌傳」に述べる「尤物に懲りる」のも玄宗への教訓を指すこと等から、「此恨」の主體も玄宗であると考え、「天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期」の二句を詩全體の總括句として捉える解釋に與したい。

但し、天子に全く無縁の民間の妓女等が「此恨」の主體を楊貴妃と捉えることも、誤解ではあるが、あり得るのではないかという事情について、拙稿の最終「まとめ」において補述したい。

最後に「李夫人」においては、その主題を「嬖惑に鑒みるなり」（天子の過度の賤女寵愛による國家惑亂を鑑戒とする）と明記するように、氣に入りの樂人李夫人を失った漢の武帝の傷心を詠みつつ、詩の終盤では、馬嵬に眠る楊貴妃を追懷する唐の玄宗の無念の「恨み」に言及し、「長恨歌」末二句に酷似する「此の恨みは長に在りて銷ゆる期無からん」とまとめる。そして最後に、「尤物は人を惑はして忘れ得ず、人は木石に非ざれば皆情有り、如かず傾城の色に遇はざらんには」と結ぶのである。まず、「長恨歌」の末句「此恨綿綿無絕期」と「李夫人」の「此恨長在無銷期」の表現の酷似は、議論喧しい「長恨歌」の「此恨」の主體が楊貴妃ではなく、「李夫人」と同じく玄宗であることを我々に示す有力な證左となるであろう。「李夫人」に登場する「尤物」は、確かにそれまでの「鶯鶯傳」「長恨歌傳」に見られる「尤物」觀を繼

承するものの、白居易が堂々たる社會批判詩として詠んだ新樂府「李夫人」においては、「嬖惑」語が示す通り、天子による賤女寵愛の結果がもたらす被害は個人レベルを超えて國家をも傾けるほどに深刻である。恰も漢の武帝の愛妃李夫人の推薦詩（『漢書』卷九七上、外戚傳上）に云う通り、「一顧すれば人の城を傾け、再顧すれば人の國を傾く」（一顧傾人城、再顧傾人國、即ち、玄宗が身分を越えて楊貴妃を寵愛した結果、安祿山の亂を惹起して大唐の國運を傾ける災禍をもたらしたのである。白居易は直接言及しないが、『新唐書』卷五の玄宗本紀贊に高祖―中宗及び玄宗の例を挙げ、「嗚呼、女子の人に禍する者甚だし」と慨嘆するように、諫官の白居易は「尤物」＝「女禍」として國家に危害をもたらす危険を認知するが故に、敢えて憲宗に過度の女色を慎むべく「李夫人」を上奏したもののように筆者には讀み取れる。ともあれ、「李夫人」に用いられる「尤物」は、「鶯鶯傳」「長恨歌傳」と較べ、一諫官の天子への新樂府上奏という背景もあり、既に個人の感慨を超えて、より強く公的諷諭が滲んだ用語となつて用いられたものではあるまいか。

## 七 まとめ―官民（雅俗）の立場から見た「長恨歌」の「恨」

最後に、白居易自身の官民の立場から、また雅俗の概念を適用しつつ、「長恨歌」の「恨」について改めてまとめ直してみたい。（ここで「雅」は『詩經』由來の詩人の傳統を踏襲する詩人官人またその詩風をいい、「俗」はそれ以外の民間の俗人庶民また詩風を指す。）

元和元年（八〇六）、白居易が深い愛情と共に詠んだ「長恨歌」は發表直後から大きな反響を呼んだが、意外にも當の白居易はその反響に

少なからぬ戸惑いや違和感を感じたようである。十年後の元和十年（八一五）、宰相刺殺事件に絡んで江州に貶謫された白居易は、それまでの自己の詩文を整理する中で、「編集拙詩成十五卷、因題卷末、戲贈元九・李二十」（拙詩を編集して十五巻と成し、因りて巻末に題して、戯れに元九・李二十に贈る）詩（二〇〇六）を詠む。その冒頭二句は次のようである。

一篇長恨有風情 一篇の「長恨」に風情有り

十首秦吟近正聲 十首の「秦吟」は正聲に近し

「長恨」は「長恨歌」、「秦吟」は「秦中吟」を指し、兩詩とも『白氏文集』卷十二、卷二に編入されることから、兩詩とも當初の『白氏文集』十五巻中に含まれていたと思われる。白居易はここで、「一篇の「長恨歌」は情愛深く描かれ、十首の『秦中吟』（〇〇七五—〇〇八四）は詩本來の詩人の姿に近い」として、この二作を自信作の代表として自贊する。特に「長恨歌」については、世間での大流行について、作者自身が豫想外であった、むしろ違和感があったことについて、次に紹介する「元九に與ふる書」（二四八六）中においても率直に吐露している。

・妓女が「白先生の長恨歌を歌える私は他の妓女より高いわよ」と言つて身請け代を上げようとした（妓大誇曰、我誦得白學士長恨歌、豈同他妓哉？ 由是增價）。

・漢南を通過した時、多くの妓女が自分を「この方が秦中吟・長恨歌の作者よ」と指さした（過漢南日、諸妓見僕來、指而相顧曰、此是秦中吟、長恨歌主耳）。

・長安から江西（左遷された江州）に至る廣い範圍で、學校・寺院・旅館や行き交う舟に屢々自分の詩が記されており、庶民・僧侶・

寡婦や未婚女性に至るまで、よく自分の詩を題詠していた（自長安抵江西、三四千里、凡郷校、佛寺、逆旅、行舟之中、往往有題僕詩者。士庶・僧徒・孀婦・處女之口、每每有詠僕詩者）。

この部分は九世紀唐朝における詩文や音曲の流行の實態を伝える貴重な實例資料でもあるが、白居易はこの風潮を受け、「今時俗所重、正在此耳」（今の時俗の重んずる所は、正しく此に在り）として、「長恨歌」を含む自作の世間での流行を認識しつつ、次のように述べる。

今僕之詩、人所愛者、悉不過雜律詩與長恨歌已下耳。時之所重、僕之所輕。（今僕の詩、人の愛する所は、悉く雜律詩と長恨歌已下に過ぎざるのみ。時の重んずる所は、僕の輕んずる所なり。）

ここに白居易が「長恨歌」について、「世間では流行しているが、自分は輕視する」と屈折して評するのは何故だろうか。「元九に與ふる書」のこの部分は必ずしも「長恨歌」の「恨」に限定して作者が述べている譯ではないが、白居易が重視する「僕の重んずる所」は「長恨歌」の「恨」に深く關わる根幹部であろう。言い換えれば、この世間での流行と自分の意圖との乖離は、「長恨歌」の内容、即ち主題に關わる「此恨」をどのように解釋するかの問題に深く係わると筆者は考える。上述のように、従來の「長恨歌」就中「此恨」解釋には、玄宗―楊貴妃の戀愛の破綻と、楊貴妃を亡くした玄宗の悲哀の兩方向から解釋されているが、ここに妓女が唱う「長恨歌」の「恨」とは、決して後者の玄宗の立場に發する悲哀ではなく、前者の楊貴妃の立場から發する戀愛の破綻に發する「恨」であると思われる。

即ち、先に言及した「長恨歌」流行の擔い手である妓女を含む庶民（俗人）が愛した、つまり世俗が重んじた所のはこの方向の玄宗と楊貴妃の愛情故事の方向であつて、決して楊貴妃を亡くした玄宗の傷心

に對して同情し配慮する方向ではなかつたのではないか。というのも、當時の庶民、まして妓女にとつて、同じ社會層に屬する身近な楊貴妃への同情は充分にあり得ても、雲上の絶對存在である皇帝玄宗への同情や配慮は想像さえできなかったであらうからである。ただし、天子に仕える進士、まして諫官左拾遺を拜した白居易にとつて事情は同じではない。社會諷諭詩たる所謂新樂府は天子に上奏するものであつて、諫官の重要職務の一である。「李夫人」は「嬖惑に鑒みるなり」とその主題を明記する。問題は「長恨歌」において果たして白居易の諷諭の意圖が明示されているか否かである。結論から言えば、「長恨歌」には一見諷刺の意圖が明記されていないように見えるが、「李夫人」と共通する「尤物」觀、末句の類似、「長恨歌」が玄宗を主體とした詩であること、冒頭―末句の「漢皇重色思傾國」―「此恨綿綿無絕期」表現の首尾連關等を勘案すれば、やはり「長恨歌」も「李夫人」に共通する諷刺の意を底に有していた（直接には「長恨歌傳」にその意を代行して顯現させた）と考えるべきである。ただ「長恨歌」の場合、通俗文學が歡迎する玄宗と楊貴妃の戀情が連綿と描かれており、末句「此恨綿綿無絕期」という詠嘆も直前の楊貴妃の口傳「比翼鳥、連理枝」に連續した詠嘆と捉えることも一見可能であるために、今日まで續く「此恨」解釋の乖離を招いたのではないか。主因は白居易にこそある。繰り返すが、「長恨歌」の主題である「此恨」の内容として、玄宗―楊貴妃の戀情の破綻、また楊貴妃を亡くした玄宗の悲哀という二方向について、今に至るまで妓女を含む通俗文學において歡迎されたのは主に前者の戀情であつた。この意味からすれば、先の「元九に與ふる書」に言及する妓女は「此恨」を「比翼鳥、連理枝」に續く楊貴妃の恨み言と解釋して唱つていたかも知れないが、玄宗の恨みとは思

もしなかつたのではないか。しかし、白居易が意圖した「尤物」觀や「長恨歌」全體の構成等を慎重に分析すれば、「此恨」の主體はやはり楊貴妃ではなく、玄宗であると考えられる。この間の解釋の相違が「元九に與ふる書」において、「時の重んずる所は、僕の輕んずる所なり」という乖離となつて吐露された、つまり、世俗が歡迎したのは玄宗と楊貴妃の戀情描寫（戀物語）であつたのだが、官人また「詩經」の詩人を標榜する白居易が重視したのは、爲政者玄宗の側に立つた「忍情」であつたのではないか、と筆者は考えるのである。

## 注

- (1) 花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、昭和三五年）による詩文番號。以下、本文中に引用する白居易詩文の後に同様に付記する。
- (2) 『白氏文集』の引用は、基本的に那波本による。ただし、ここは金澤本等に據つて、「盡」を「絶」に改める。平岡武夫・今井清校定『白氏文集』（京都大學人文科學研究所、一九七一年）を参照。
- (3) 最近では下定雅弘『長恨歌 楊貴妃の魅力と魔力』（勉誠出版、二〇一一年）六四―六九頁に解説がある。
- (4) 『日本における白居易の研究』、『白居易研究講座』七、勉誠社、平成十年。
- (5) 『長恨歌・琵琶行の研究』明治書院、昭和五六年。一五頁。
- (6) 『白樂天と空海』、『空海及び白樂天の著作に係わる注釋書類の調査研究』下、勉誠出版、平成一九年。二二―二頁。また『中唐文人考』（研文出版、一九九三年）所收。
- (7) 『松浦友久著作選Ⅱ』、研文出版、二〇〇四年。初出は『白居易研究年報』創刊號、勉誠出版、二〇〇〇年。
- (8) 「詩語としての『怨』と『恨』―閨怨詩を中心に―」、松浦友久『詩語

の諸相―唐詩ノート』増訂版所収、研文出版、一九九五年。

(9) 勉誠出版、二〇一一年。

(10) 『白居易戀情文學論―長恨歌と中唐の美意識』勉誠出版、二〇一一年。

(11) 下定雅弘譯。副題は「―長恨歌」にこめられた悲劇の重層性。『白居易研究講座』二(勉誠社、平成五年)所収。

(12) 陝西人民出版社、一九八三年。

(13) 巴蜀書社、二〇〇三年。

(14) 中華書局、二〇〇五年。

(15) 南京大學出版社、二〇一〇年。

(16) 中國社會科學出版社、二〇一三年。

(17) その他に以下の同様の諸例が見られる。

「長恨歌」に「遂に天下の父母の心をして 男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ(遂令天下父母心 不重生男重生女)」と。また杜甫「兵車行」(『杜詩詳註』巻一)に「信に知りぬ 男を生むは悪しく 反つて是れ女を生むは好し(信知生男惡 反是生女好)」と。陳鴻「長恨歌傳」に「女を生むも悲酸する勿れ 兒を生むも喜歡する勿れ(生女勿悲酸 生兒勿喜歡)」(樂史「太真外傳」同じ)と。司馬光『資治通鑑』巻二二五、天寶五載條に「男を生むも喜ぶ勿れ 女(を生む)も悲しむ勿れ 君今看よ女門楣と作るを(生男勿喜女勿悲 君今看女作門楣)」と。

(18) 『漢書』巻九七下、外戚傳下に、「孝成趙皇后、本長安宮人。」とある。「趙皇后」は趙飛燕。「宮人」は、師古注によれば「省中の侍使の官婢」。

(19) 『漢書』巻九七上、外戚傳上に、「孝武李夫人、本倡を以て進む。」と。倡は娼に同じ。

(20) 拙稿「楊貴妃という人物」(『アジア遊學』二二〇、松原朗編、勉誠出版、二〇一八年六月)参照。

(21) 白居易が官吏として公務を執行する場合、私人としてくつろぐ場合等

を區別して考えたい。例えば後述する「長恨歌」は縣尉としての公務中においてではなく、友人との私的で気ままな休日旅行中に詠まれた。このことは白居易が「長恨歌」を「感傷」に部類することと大きく關わる。またこの官民(公私)の概念は所謂雅俗の概念に直結する。第七章参照。白居易詩文の辨別評價において、詩作時の公私の區別を峻別すべきことについて、靜永健「白居易「諷諭詩」の研究」(勉誠出版、二〇〇〇年)を参照。

(22) 事實、後世の明清期を中心とする『西廂記』諸本においては、張生が見事科擧に合格して二人はめでたく團圓する。

(23) 周相録『元稹集校注』(上海古籍出版社、二〇一一年)一五二〇頁に、「鶯鶯傳」について、「貞元二十年(八〇四)長安に於いて作る。時に祕書省校書郎たり」とある。つまり、時に校書郎たる白居易と元稹は同一空間を生きていたことになり、「尤物」語も二人の共通語であったと考えられる。

(24) 元稹は「會真詩三十韻」を詠んだ二年後の貞元十九年(八〇三)に、名士韋夏卿の女韋叢と結婚し、また白居易も「長恨歌」を詠んだ二年後の元和三年(八〇八)に、弘農華陰の名族楊氏の女と結婚している。卞孝萱『元稹年譜』(齊魯書社、一九八〇年)、周相録『元稹年譜新編』(上海古籍出版社、二〇〇四年)参照。また陳翀「友の亡妻に代わって詩を賦す白居易―元稹の妻韋叢の死とその悼亡唱和詩」(『日本中國學會報』第五九集、二〇〇七年)。同氏著『白居易の文學と白氏文集の成立』(勉誠出版、二〇一一年)所収。また平岡武夫「白居易とその妻」(『東方學報』(京都)三六冊、京都大學人文科學研究所、一九六四年)参照。

(25) 多くの先行研究は「尤物を懲らしめ」と訓むが、提示される尤物故事からは尤物を懲戒する方向の解釋が見出し難い。ここは「楊貴妃を懲らしめる」意ではなく、「(玄宗が)尤物に近づくと痛い目に遭うことに懲

りての意であろう。即ち「懲」は他動詞「懲らしめる」でなく、自動詞「懲りる」(こりこりする。懲りて自ら戒める)意であると解したい。

(26) 清・徐松『登科記考』卷一五。とすれば、陳鴻も當時元稹・白居易の周圍にいた可能性があるが、他の確證に乏しい。

(27) 諸田龍美前掲注(10)参照。なお、筆者が曾て下原稿を擔當した『白氏文集三』(岡村繁著、明治書院、一九八八年)四五四頁の該當記述を謹んで訂正する。

(28) 楊貴妃の出世にあやかつて、當時の民間に女子の誕生を望む謠言が流行した現象も根底は同じである。注(17)参照。

(29) この問題を更に敷衍すれば、後世明清時代に盛行する通俗文學(戯曲小説)に登場する皇帝(もしくは高僧や最高権力者像が『漢宮秋』の元帝、『三國志』の劉備、『水滸傳』の宋江、『西遊記』の玄奘いづれも然り、最高権力者の存在でありながら、何故にかくも優柔不斷の)へなちよこ乃至決まり切った定型として描かれるのかという興味深いテーマに逢着する。その考察は別稿において改めて行いたい。解答のポイントとして、明清時代に流行した通俗文學は、六朝の貴族文學とは違い、一般に発信者(作者・演者)として、皇帝等の絶対存在とは無縁の無名庶民が擔い、在野の彼らは雲上世界の具體情報に乏しかったことが大きな要因として擧げられるであろう。

筆者は「長恨歌」の「恨」の主體は玄宗であると解する今日の定説(近年では松浦友久説、注(8)参照)に沿って論述してきたが、ふと思えば、「元九に與ふる書」中に登場する「長恨歌」を暗誦する妓女も同様に考えていただろうか、否、この妓女は「此恨縣無絶期」を吐露した主體を玄宗ではなく楊貴妃と捉えていたのではないか、という疑念を抱くようになった。眞逆の解答を同一論文中に包含するのはさすがに都合が悪いが、どう考えてもこの妓女は楊貴妃側の立場であり、玄宗側の間人と

は考え難い。一方、天子と距離が近い新興知識人たる白居易は雅俗の雙方を見渡せる立場にあつた。新樂府「李夫人」はそれこそ天子を諫めた作品なのである。

こうして、拙稿は定説の立場を踏襲しながら、その逆の場合も排除しないという矛盾を抱え込むことになつたが、實は筆者としては、このことは一方で新しいテーマを展開する契機ともなつた。というのは、この注の冒頭に言及した近世文學では、日本・中國共に所謂通俗文學が盛行しており、この種の雅俗の峻別が喧しいのだが、明清の通俗文學の擔い手の多くは在野の世俗人である。明清通俗文學の擔い手と「元九に與ふる書」に登場する妓女を同一視することはできないが、上記の通り、明清の通俗文學に登場する皇帝の描寫があまりにも實在性に乏しい紋切り型が多いことに疑問を抱いていた筆者にとつて、「長恨歌」の「恨」の主體を一般の妓女或いは楊貴妃に想定して考えることは、その可否はともかく、中國文學における雅俗問題を介して、汎用性のある魅力あるテーマに逢着することとなつた。筆者は「長恨歌」の「恨」の主體を安易に楊貴妃に比定する意圖はないが、この問題についてはもう少し慎重に今後の追究を俟つことにし、ひとまずここに備忘メモを残しておきたい。